

忘れられた伝統文化の復活： 元城盆踊りの変遷と西馬音内盆踊りとの関係について

狩野春江

日本三大盆踊りであり国の重要無形民俗文化財にも指定されている、秋田県羽後町の西馬音内盆踊り。この町にはもう一つ、同じ起源を持ちながらも、現在まではほとんど人に知られることのない元城盆踊りがある。大正時代に途絶え、60余年後の昭和51年頃に復活を遂げた、比較的目新しく見える盆踊りだ。

かつて当地では西馬音内盆踊りに比肩するほどのイベントであったが、明治以降に浸透した貨幣経済や地主制度等の弊害により、次第に衰微していく。大正に入ってから、有志達によって細々とその習俗は守られていたが、いつしかその灯も消えた。

そして昭和51年頃になり、「伝統を維持したい」との声があがり地元の婦人会や有志達によって盆踊りが再興される。踊りの型等は往時を知る古老たちから教わったが、囃子は永久に失われた技となり西馬音内盆踊りのものを採用している。

その後昭和60年頃に、伝統維持、地域活性化に主眼を置いた元城盆踊り保存会も結成され、現在に至っている。国の保護指定を受けた西馬音内盆踊りのような脚光を浴びてはいないが、地域住民が伝統やふるさと感じる「心のよりどころ」的な行事の一つとなっている。

それにしても、元城盆踊りはなぜ今までまっ

たく知られることがなかったのだろう。一つには、秋田県内外の民俗学者などにこの習俗が特筆に値しないと、みなされていたため、二つ目は、数々の災害のより史料・記録がまったく残っていなかったためである。だがもっとも大きな要因と思われるのが、旧地主の存在と彼らに支えられた西馬音内盆踊りの拡大である。西馬音内盆踊りが指定を受けた際、町当局は旧地主達の気に入るような様々な言説・イメージを付加する。それに加え、マスコミ・観光客が作り上げたイメージも加わり、西馬音内盆踊りを不動の地位にまで押し上げている。その時に、その「正当」化のイメージをだぶつかせてしまう、「新しい」元城盆踊りは観光パンフレットからの削除など、外部の目にふれないようにさせられていく。

もちろん、元城盆踊りは往時の姿を全て取り戻したわけでもなく、一般的に考えられる歴史や伝統のイメージともかけ離れているため観光PRには向かない。それで町当局や外部の関心は向けられなかったのもあろうが、草の根の「伝統を守り盆踊りを愛する」という心構えは、それらの影響を受けてはいない。元城・西馬音内盆踊りを行き来し、互いに支えあいその両立を願っているのだ。

ホールを拠点とした文化振興：たざわこ芸術村を事例に

佐藤みほ子

1970年代、日本の自治体の多くで文化都市や芸術都市を目指し、文化ホールの建設を行った。文化ホールは本来、地域の文化振興の拠点となる場である。ホールでの文化活動により、文化芸能が身近に親しめるようになる。そのような目的のもとに建てられた文化ホールだが、日本の文化ホールの多くは貸し館経営となり、文化振興の拠点としての役割を果たしていない。こ

れは事前計画の曖昧さ、ホールの使い勝手の悪さに起因するものだ。このようなホールが多い日本であるが、ホールを中心とした文化振興を成功させている町もある。

成功例を調べる中で、秋田県田沢湖町にある「たざわこ芸術村」に注目した。たざわこ芸術村は劇団「わらび座」の専用劇場である「わらび劇場」を中心として活動を行っている。日本の

ホールが公営のものが多いのに対し、わらび劇場は民営で行われている。劇場だけでなく、温泉宿泊施設やレストラなども揃え、地域の文化交流の場となると共に、観光地としても発展している。多くホールが本来の役割を果たせていない日本で、本来の役割に加え、観光地としても大きく発展した特異性に注目した。

たざわこ芸術村の今の運営形態は、事前構想があったわけではなく、必要に迫られて整えたという背景がある。そのため現在は各施設がほぼ独立して活動を行っている。しかし、どの施設も積極的に活動し、地元だけでなく、全国に

向けて文化発信を行っている。

地域の文化振興に成功しているホールには具体的な事前構想、住民への柔軟な対応、積極的な働きかけという共通点がある。たざわこ芸術村は民営であり、専用劇団を持っているという点で公営のホールとは異なる点も多い。しかし、先の特徴を十分に満たしていた。一般のホールとは異なる点を独自の特徴とし、それが観光地までに発展した大きな要因であった。他に例を見ない、新たな体系の一つとして新しい可能性を示している。

街の魅力：吉祥寺を事例に

高橋 彩

街にも流行がある時代である。

雑誌の街特集の常連であり、東京都内でも有数の繁華街である街の1つに「吉祥寺」がある。「吉祥寺」はかつて、新宿以西で最大の商業地であったが、近年その人気にかけりも感じられるが、果たしてそうなのだろうか。時代に流されることなく、私たちを魅了し続ける街はないのだろうか。もしあるとすれば、その街にはどのような魅力があるのだろうかと考え、調査を始めた。

雑誌記事の分析や、まちづくりに携わる方々

への聞き取り調査を行って、吉祥寺の発展から現状までを調査したところ、発展にはいくつかの要因があり、吉祥寺の商圈は予想より狭く、街の性格に変化も見られることがわかった。

調査を通して見えてきた吉祥寺の街の魅力は、自然環境から繁華街まであらゆる要素がコンパクトな空間に収まっている多様性とそれらを支える行政、商業者、住民の一体となった取り組みであり、それこそが時代に流されて消え行くことなく私たちを魅了し続ける街にとって必要なものである。

福岡市中央区天神エリアにおけるカフェの研究

徳永 祐子

本論文は、喫茶店・カフェの歴史、2000年カフェブーム、地方中核都市福岡市中央区天神エリアのカフェの特徴を調べることによって、カフェが持つ魅力、福岡におけるカフェの役割を調べたものである。

我が国における喫茶店第1号は明治21年に上野に開店した「可否茶館」だと言われている。以来喫茶店は都市のたまり場として機能している。

1990年代に入ると低価格コーヒーチェーンが主流となり、昔ながらの喫茶店の時代は崩壊し

た。シアトル系コーヒーショップが登場すると2000年カフェブームの下地が作られた。

2000年カフェブームとは今まで流行したカフェとは異なる東京（日本）独自のスタイルを持ったカフェが増えたことを指す。本論文ではカフェを①喫茶店②コーヒーショップ③ヨーロッパアンカフェ④食堂カフェ⑤部屋カフェに分類し、福岡市中央区天神エリアの大名地区と今泉地区のカフェを比較した。するとそれぞれの地区の発展の様子によってカフェの分布に違いが見られた。